

社会保障論評22-002号 (作成日: 2022年8月4日)

「50代、働いてない？」 朝日新聞2022年8月4日付朝刊15面

- 耕論欄における意見交換で、「出世競争から降りた50代の勤め人が、とかく生きにくい世の中となった。『働かないおじさん』『会社の妖精さん』なんて言葉もある。ずっと懸命に働いてきたのに、どうしてこうなるの？」という点をテーマにしたものである。
- 健康社会学者の河合薫氏は、「日本社会のかたちが、いまだに昭和の高度成長期のままで動いているから」としている。氏からの対処策としてのアドバイスは、「自分は会社のためには働かず、人生のために働く。そう考えればいいんです」というものである。
- ジャーナリストの斎藤貴氏は、「『働かない中年』を非難しているのは、おそらく大企業の若手ですよね」とし、「いずれ自分に返ってくる。そんなことも思い及ばないくらい、多くの人が新自由主義を内面化してしまっているのでしょう」と分析している。
- 立教大学の中原淳教授は、「『働かないおじさん』という世間に流布する言葉は、給与に対して成果が見合わず、『もらい過ぎ』の状態を指した言葉」とした上で、「50代の針路について本当は35~40歳から考えなければならない」という指摘をしている。
- 設問も回答も、ありきたりの域を出ていない。そもそも、このような設問を設定した人自身が、大新聞の高齢正社員であって、成果に見合わない賃金を得ている状態に後ろめたさを感じながらも、自身を正当化する言い訳を求めているような気がしてならない。
- 「大企業の若手」に言及の斎藤氏の脳裏には、正社員との賃金格差に苦しみ、昇進など望むべくもない低賃金で、必死に毎日の生活を賄っている（多くは女性である）非正規労働者の事など、まるで思い浮かんでいないのではないか。全体が強者の戯言である。
- 日本の労働市場の有様を見れば、江戸時代の士農工商制すら彷彿とさせる、正社員、パート労働者、派遣労働者、外国人労働者といった区分による身分制になっている。少子高齢化で現役世代が縮小する中、このような時代錯誤で対応していけるはずはあるまい。
- つい先頃まで、ゲームやアニメの隆盛から見て、日本はIT先進国に属するのだろうと、この私ですら、愚かにも思っていた。新型コロナ渦の中で、オンラインでの対応や事務処理におたおたし、いまだに感染者情報をFAX処理している現状を見て、目が覚めた。
- 「働かないおじさん」の多くは、IT操作すら覚束ないのではないか。IT担当だった桜田義孝大臣は、2018年11月14日の国会で、「自身ではコンピューターを使用し（できない）」と発言して国内外から失笑を受けたが、今に到るも氷山の一角のように思える。
- 現在、何よりも重要な事は、限りある人材を（再）教育して、今後必要となる分野に振り向けていくことであろう。重要性も生産性も低い分野に、低賃金で労働者を縛り付けることなど、あってはならない。「働かないおじさん」が存在できる余地などないのだ。
- ただ、そのような時代の変化への対応の中では、とり残される人も少なからず出て来るであろう。そうした人々の生活の安定に目を向けることこそ、社会保障制度の役割であろう。日本社会には、その認識と覚悟が不足しているように思えてならない。（以上）